

女子大学生が振り返る同性友人関係

— 前青年期から青年期を通して —

須藤 春佳

Same-sex Friendships During Adolescence as Viewed Retrospectively by Female College Students

SUDO Haruka

Abstract

Many children spend their school lives, from childhood to adolescence, with their same age group. At the time of adolescence, relationships with same-sex friends can be important in identity formation as children develop independence from their families. Friendship therefore plays a role in emotional protection. However, if adolescents have trouble with their friendships or cannot keep up with their friends, then they may have difficulty adapting to school life. Peer group relationships therefore have a strong influence on school life.

We conducted research with a group of female college students. Participants were asked to retrospectively examine their friendships in childhood and adolescence and to freely write down the “good aspects of friendship” and the “difficult aspects of friendship,” using their own expressions, as a type of academic report.

Ninety-two participants responded to the questionnaire. We categorized the answers by content. Answers covering the “good aspects of friendship” included experiences of empathy, sympathy, and self-disclosure. These were positive aspects of friendship. Answers covering the “difficult aspects of friendship” included experiences of conforming behavior, bullying, and worry about maintaining friendships. These were negative aspects of friendship. Many of the difficult aspects of friendship were associated with the respondents’ experiences in junior high school. They especially had difficulties with friendships within girls’ groups. As a manifestation of peer pressure (Kurosawa, 2007), during junior high school children demand sameness among friends, so those who differ from others are victimized and the unity of the group increases. Our results demonstrated the difficulties experienced with friendships during junior high school, especially within groups. This trend can be seen as evidence of peer pressure.

キーワード：思春期、女子大学生、友人関係の否定的側面、友人関係の肯定的側面、回想法、同性友人関係

Key words： Adolescence, female college students, negative aspects of friendship, positive aspects of friendship, retrospective method, same-sex friendship

本学人間科学部心理・行動科学科専任講師

連絡先：須藤春佳 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学人間科学部心理・行動科学科
sudo@mail.kobe-c.ac.jp

1. 問題・目的

児童期から思春期、青年期にかけて、子どもたちは学校生活において、多くの時間を同年齢集団の中で過ごすこととなる。「第二の分離・個体化」(Blos, 1962)の時期とされる思春期においては、子どもが家庭から社会へと自立の道を歩むうえで、身近な同性友人との親密な関係が、彼らの自己形成において重要な役割の1つを果たす。そこでは、友人関係が互いを支え合い、多感な時期を乗り越える上で情緒的な保護の役割を担う側面もあると同時に、友人関係がうまくいかなくなれば、学校生活の適応が悪くなりうるという点で、同年齢の子どもたち同士の関係がいかにあるかは、彼らの生活に大きな影響を及ぼすといえるだろう。筆者はこれまで、前青年期(前思春期)の同性親友関係「チャムシップ」(chum-ship, Sullivan; 1953)に焦点を当て、相手のことが自分と同等かそれ以上に重要に思えるような支持的な友人関係が、この時期を乗り越える上で重要となり、またそれまでの発達上の歪みをも修復するという、発達促進的な側面について研究してきた。一方で、この時期の友人関係における難しさにも目を向ける必要があると考え、いじめや事件等の関係についても検討した(須藤, 2011)。

児童期から思春期にかけての同性友人関係の発達の变化、およびそこで生じうる難しさについては、次のような見解がある。保坂・岡村(1986)によると、友人関係には3つの発達段階があり、まず、小学校の高学年頃が中心となり外面的な同一行動による一体感を特徴とする“gang-group”、次に、中学生頃に活発になり内面的な互いの類似性の確認による一体感を特徴とする“chum-group”、最後に、内面的にも外面的にも互いに自立した個人としての違いを認め合う“peer-group”の順をたどるという。また実際に、中学生の方が高校生よりも、自分の意見を抑えて相手の意見に合わせるような同調的な友人関係を持つということが、数量的データにより実証的にも示されている(石本ら, 2009)。同研究のなかで、「心理的距離は近く、同調性の高い密着した関係を取る者は、中学生では概して適応的」であったが、高校生ではこのような傾向の者は「学校適応においては適応的ではあるものの、心理的適応に関しては不適応的」であるとの結果もみられた。

一方、「chum-group」が特徴とされる中学生頃は、仲間間で同質であることを求めあいつぎるため、少しでも異質な部分を感じられる仲間内の特定の誰かを仲間外れにすることで、集団の凝集性を高める現象が生じ、いじめとの関連が深い段階であると指摘されている。このような同質性を求める仲間からの同調圧力を、黒沢(2007)は「ピア・プレッシャー」と呼び、中学生の不登校事例との関連で考察している。このように、中学生時における友人関係の困難な側面について指摘されているが、この現象は、特定の人たちのみでなく広くこの時期の友人間に生じているのだろうか?本研究では、一般的に中学生、高校生の時期に友人関係における困難が男子よりも大きいとされる女子に焦点を当て、女子大学生を対象に調査を行った。ここでは彼女たちの児童期から思春期、青年期にかけての友人関係を回想してもらい、そこで体験した「よかったこと」「難しかったこと」を尋ねることで、実際にこの時期を通過してきた彼女たちが、どのように友人関係のポジティブな側面およびネガティブな側面を捉えているのかを自由記述によって求め、質的データに基づき調べることを目的とした。

2. 方法

A大学の講義時間の中で、受講生を対象にレポート形式で回答を求めた。教示は「あなたの過去の同性友人関係の体験を振り返り（前青年期以降）、①よかったこと、および、②難しかったことについて述べてください。いつ頃の友人関係かを明記する（①と②の時期は同じでなくてもよい）こと、具体的なエピソードがあれば、それについて述べること。事実と気持ち（感情）を分けられれば望ましい。」とし、約1か月間の間隔を置き、レポートの提出を求めた。なお、同時期に、本授業の中では前青年期～青年期にかけての友人関係についての講義を行っていた。

3. 結果

回収されたレポート数は、合計92（2年生70人、3年生18人、4年生4人）であった。記述された内容を、「よかったこと」「難しかったこと」に分け、書かれた内容を要約する形で一覧表にした。その上で、類似の内容のものをまとめ、カテゴリーを作成した。結果を表1、表2に示す（表中の例は、抜粋である）。

（1）前青年期以降の同性友人関係でよかったこと

抽出されたカテゴリーとその例は、表1の通りであった。ここでは具体例を詳細に提示しながらみていくこととする。まず、「性格の前向きな変化」「自分への自信」では、友人と付き合ったことによって自分に自信がもてたことや良い影響について述べられたものが入った。また、特に多くみられたのが「自己開示、相談、本音（個人）」であるが、これは、友人に対して相談できる、自己開示できる、本音で話せるような内容を指し、特定の友人との間で体験された場合と、複数の友人で構成される仲間関係の間で体験される場合に分かれた。具体例として、以下のようなものがみられた。「例1：中学時代の友人とは、交換日記を通じて、お互いの悩みや気持ち、普段言い出せないようなことを共有し、相手の立場になり相手の悩みに対する真剣なレスポンスとなっていた。真剣に考えあうことにより、仲を深めていった。今でも彼女とは仲良く、彼女がいなければ今の私はいない。本当の友達とは、この人ならば私を受け入れてくれるだろうという安心感を与えてくれる人のこと、またそういった関係のことだと思う。」

なお、複数の友人で構成されるグループの間で体験される場合については、部活や勉強で苦労を共にした仲間関係や、同じ話題で盛り上がる、同じ目標に向かって深く繋がり合う関係について触れられていた。チャムシップと前青年期的社会を表すような、小学校時代の仲間関係について触れられているものもあった。「例2：この頃の友情は、自分をどう相手に見せるかという思いはなく、純粋に付き合っていた。背景に親の存在。親との関係も把握、家族のことでの悩みも相談。みんなで集まる秘密基地のような部屋があり、休み時間になるとそこに集まった。先生に秘密でCDをかけたり漫画を持ってきて読んだり。交換日記。たくさん衝突して、本音でぶつかりあった分、今の友情関係があると思う。この頃の友情関係は安心できる、帰る場所のよう。」

表 1. 前青年期以降の同性友人関係でよかったこと（作成されたカテゴリーと解答例）

<p>性格の前向きな変化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仲が良かった。Mのおかげで友達が増えた。積極的になった。 ・人とかかわることが好きになったのは彼女のおかげ。
<p>自分への自信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・純粹に相手の幸せを望める関係、私が幸せであることを望んでくれる友達がいることが、自分の自信につながった。 ・仲間との結びつきが強いという安心感から一人で行動できるように。他人の意見に左右されず自分の考えを言えるように。
<p>自己開示、相談、本音（個人）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学時代、幼馴染となんでも言い合っていた。本気でぶつかっていきける存在だった。 ・中学時代、交換ノートで恋愛の相談や将来のこと、誰かの詩や名言、絵を描いてつながりを深めていた。 ・高校時代の友人、親友。信頼。話していたことはほとんど恋愛のこと。家族や家の問題、過去のことなどを語ってくれた。
<p>自己開示、相談、本音（グループ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学時、女子の結束力が強く、数人のグループで行動を共に。悩みを打ち明け、助け合い、応援しあう特別な関係。 ・中高一貫校。仲良い3人。家庭環境も似ていた。家族のことなど話せた。今でも続いている。
<p>共感</p> <ul style="list-style-type: none"> ・喜びや悲しみを感じる場面が似ているため、相談した時自分の感情をわかってもらいやすい。 ・同性同士にしかわからない感覚や感情の共有。友人として同性に勝るものはない。
<p>心の支え</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親友がしんどかったとき、支えてくれ、反対の時も支えた。
<p>理解してくれる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中高時代の友人 S。厳しい意見も言ってくれる。自分の気持ちを相手も同じように理解してくれていると感じられる。
<p>仲間外れ体験を止める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学時、はぶられている友達（親友）にも普通に接したことで、絆が深まった。私がいってくれてよかったと言ってくれた。 ・いじめられていたが、そんなときに一人の子と仲良くなり、いじめているグループの人のことはどうでもよくなった。
<p>居場所、避難場所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中3～高2まで特定の友人2人と一緒に行動していた。居場所、安心感。勉強面や家庭内でのストレスが癒された。
<p>世界が広がる・共通の趣味</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界が広げられる。よい影響。共通の趣味。がんばること。 ・中学時代、本の話ができた友人。充実した学生生活。
<p>共に頑張る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学受験を一緒に乗り越えた高校時代の仲間関係。 ・高校でテニス部に入部、同じ目標に向かって深く繋がり合える仲間ができた。
<p>ライバル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校～高校にかけての A さん。同じ部活に所属、友達ではあるが良いライバルでもあり同志。
<p>思い遣り、見返りのない友情</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の幸せを少し削ってでもいいから幸せになって欲しいと思える友達が出来たことは本当に嬉しかった。同性間でこままでの友情をはぐくめたことは一生の財産だと感じている。 ・親友とは、自分の理解者であり、相手に見返りを求めることなくその人を好きになったり理解しようとする姿勢。
<p>互いの違いを認め合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校、それぞれの良いところをみんなで受け入れている関係。
<p>自分を高めてくれる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親友とは、自分を高めてくれる人。
<p>楽しさ、面白さ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中高生の頃の友人とは、おもしろさを求めることによって、自分をだせるので、長年付き合える関係を築くことができる。

表 2. 前青年期以降の同性友人関係で難しかったこと（作成されたカテゴリーと回答例）

グループ行動、グループによる拘束、束縛 <ul style="list-style-type: none">・グループでの行動。いつも同じグループで行動するのは安心感もあるが、他のグループとの交流がなくなって縛られすぎ、とても窮屈。・親密になるほど多くものを求めてしまいがち、親密さからくる束縛（HPの参加への強制）、仲が深まれば難しくなる。
グループ内の人間関係 <ul style="list-style-type: none">・「フレネミー」グループの中の友人関係と敵対関係をうまくコントロールすること。・見えないところに権力が隠されている。小学校高学年のころからグループの分裂が起こった。
流動的な関係 <ul style="list-style-type: none">・信頼できる人が出来たと思えばすぐに裏切られ、根も葉もない噂を流されたりした。
グループ内のいじめ <ul style="list-style-type: none">・小学高学年の友人関係で、誰かを排除して仲間意識を強めようとするところ。・中学時、同性同士の仲間意識が強く、10人ぐらいのグループ内で誰か一人をターゲットに絞って他の子たちが悪口を言っていた。
グループ間の対立 <ul style="list-style-type: none">・中学時代、クラスが二派に分かれて戦う。女子同士の冷戦。和解。中学生の間で、小学校の時ほど無邪気に心をさげ出して親友と呼べる位の友人を得ることはできなかった。・グループ、派閥。違う派閥の子と仲良くなりにくい。
過度の依存、距離の取り方 <ul style="list-style-type: none">・「親友」と言える人から依存され、話がきけなくなって疎遠になった（連絡がなくなった）。過度の依存→決裂・親友とうまく距離がとれないむずかしさ。他の女の子と仲良くなって、離れてしまった。
いじめられ体験、嫌がらせ <ul style="list-style-type: none">・小学5年時、今まで仲良くしていた友人と、その周りの同じグループの友人たちに、無視をされるように（言ってもいない悪口を言っていたと、一番仲の良かった友人に噂された）。
三者関係、嫉妬 <ul style="list-style-type: none">・A子とB子の間で板挟みになり大変だった体験。A子が自分をB子にとられたと感じていた。・中3時、友人に彼氏ができたことで疎遠に。仲が良すぎたため、少しの違いを許すことができず急激に疎遠になった。
同調⇄自分の意見 <ul style="list-style-type: none">・自分だけ意見が違っていると、どの話題でも話の輪の中に入ることができず、ずっと仲間外れになってしまう。・同調することと、自分の意見をもつこと。どちらにも偏りすぎない態度で接すること。
うわさ・悪口 <ul style="list-style-type: none">・これまで信頼して様々なことを話してきた友人が、自分の知らないところで勝手に話を流していたり、私の悩み事を面白おかしく話のたねにしていた。
キャラを演じる <ul style="list-style-type: none">・グループにいるときは、同時に複数の人への配慮をしたり、話す内容も気を遣い「ありのままの本当の自分」というより「キャラクター」を演じている自分がいて、素の自分をみせられる友達が少ない。そんな毎日は窮屈でしんどかった。
誰かと一緒にいたい⇄一人でいたい <ul style="list-style-type: none">・高校時代、一人の時間と友人との時間のバランスがうまくとれず、友人を疎ましいと感じることもあった。幸い、友人とは仲たがいはすることはなく、距離をとりながら付き合うことができた。
コミュニケーションの難しさ <ul style="list-style-type: none">・仲がよいと思うほど、何も言わなくても思っていることが通じると思い込み、大事なことを言わなくなってしまうことがある。・はっきり伝えることが難しい。悩みの相談をした時、傷つかないように優しい言葉に置き換えられたが伝えてほしかった。

このほか、チャムシップの特徴ともいえる「共感」してくれるといった内容や、「心の支え」になる、友人が自分のことを「理解してくれる」、「共通の趣味・世界が広がる」等もみられた。ここで、仲間からの仲間外れを体験した時に、その歯止めとなってくれる友人関係の支持的な側面についても複数あげられていた。具体例を次に示す。「例3：中1で初めて親友と感じる

友人Aに出会うことができた。部活の4人で行動していた。その中の一人Bと自分の性格が不一致であると徐々に気づき、二人対二人で行動するように。Bと関係が悪くなったことで部活で孤立してしまったが、Aはいつも味方で同学年の友人たちの仲を取り持ってくれたため、徐々に騒動は終結した。どのような窮地にいても見捨てないでくれた経験が、Aとのチャムシップを形成。」また、「居場所、避難場所」としての友人関係の側面や、「共に頑張る」「ライバル」「自分を高めてくれる」存在としての友人関係についても挙げられた。また、チャムシップの特徴を具現化しているともいえる「思い遣り、見返りのない友情」について触れられているものも複数みられた。ただその変化は高校生時に生じたということであった。「例4：無償の友情。小中学生の時なら、心のどこかに必ず『感謝されたい』と思う気持ちがあった。物でも情報でも『等価交換』があって、それがあってこそ穏便に友達でいられた。しかし高3になって、ただ相手のことを思って一切の見返りを求めずに行動することができるようになり、自分がしてあげたことを相手が知らなくてもいいから、相手の力になりたい、少しでも幸せでいてほしい。親切心というより愛情に近かった。」これらには、前青年期以降の時期において、同性友人間で得られるものの大きさがあるということが示されているといえる。

(2) 前青年期以降の同性友人関係で難しかったこと

抽出されたカテゴリーとその記述例は、表2の通りであった。ここでは、友人グループの難しさに触れているものが多くみられた。以下、カテゴリーの内容をみていくこととする。

「グループによる拘束、束縛」では、グループメンバーと同じ行動、悪口を強制される窮屈さ、親密さゆえに互いに過干渉になる、といった側面について触れられたものが入った。このようなグループの人間関係の難しさについては、「グループ内の人間関係」のなかで“フレネミー”という現象に言及しているものがあり、グループの構成員が、所属するグループへの忠誠とその中の上下関係の維持に神経を遣うありようについて述べられていた。「例5：グループの中の友人関係と敵対関係をうまくコントロールすること。高校時、グループに属していて、その中に上下関係があった（リーダー1人、補佐2人前後、その他5～8人）。全員友達ではあるが、目に見えて上下関係は存在し、上に位置する子の意に反することをすれば仲間外れに。この年頃の女子グループは、いかに固い結束力を持っているかが重要。絶対的なグループへの忠誠が必要。グループ内の自分の位置を確保し、あわよくば上にのし上がるためには、『フレネミー』の関係である必要があった。表面上は友達でありながら、同時に敵である、口では友達と言いながら、裏では相手の粗を探し、疑わしい行為を告発することで自分の地位を高める機会を虎視眈々と狙っている。リーダーの怒りを買ってしまい、無視される体験も。敵意を隠しながら友達を演じる関係は、脆く、常に気を張っていなければならない、とても難しかった。」

また、「グループ内のいじめ」について触れられているものも多かった。「例6：中高一貫の学校、今考えると幼いと思うくらい長い間、いじめや無視のし合いが続いていた。中2時、ボス的な女子がいて、その子の標的になった子はクラス全員から無視されてしまうという状況だった。標的になる子は3、4か月を目安に変わっていった。手下のようなグループと、標的になるのを避けるために無視していたグループ。私も仲良しの4人組と一緒にいたが、標的に

なった時期もあり、つらかった。なぜ自分が標的になったのかわからないし、覚えていない。」なお、このようないじめから友人を守れなかったことを後悔している人もみられた。「例7：仲がよかった部活の友人A子をいじめから守れなかったこと…後悔。A子は人との付き合い方が変わってしまった。このときA子の肩を持っていたら、もっと深い友人関係を築き上げることができたのかもしれない。」

中学時代の友人関係全般の難しさについて述べているものとしては、次のようなものもみられた。「例8：中学時代の友人関係、安心できる居場所を確保すること。友達の顔色を窺って気を遣いながら話したり、自分の意見とは違っていても同調したりして自分というものがなくなっていくような気がしていた。人がいじめられても見て見ぬふりをし、自分に危害が及ばないように自分を守ることに必死だった。信頼できる人が出来たと思えばすぐに裏切られ、『～ちゃんの悪口を言ってたよ』と根も葉もない噂を流されたりした。いじめの体験から、人の心の痛みを知ることができ、人に優しくなれたと思う」（「流動的な関係」ほか）。また、この時期の理不尽な仲間外れについて触れているものもみられた。「例9：思春期には理不尽な仲間外れが生じ、まるで物のように一緒にいる友達を変えるので、とても残酷。」これらから、いじめ、仲間外れといった、「今日の友は明日の敵」と表現できるような、流動的な人間関係をめぐる困難さが大きな割合を占めることがわかる。

また、友人との距離の取り方の難しさ、依存しあすぎてその反動で片方がしんどくなったり、別に友人ができて関係が切れてしまう難しさについてふれられたものもあった（「過度の依存」、「三者関係」）。さらに、友人との間で気を遣って合わせて相手に合わせることと、本音を言うこととの間のバランスをとる難しさに触れているもの（「同調することと、自分の意見を持つこと」）、知らないところで勝手に自分のことを悪く言われる、友人からの裏切りについて触れた「うわさ・悪口」、「コミュニケーションの難しさ」などもみられた。ここで、グループに合わせ、同調することと自分の意見を持つこととの葛藤を描いた2例を示す。「例10：周りの状況と自分の気持ちの相違。Aと仲良くしたいと思っても、グループでAを排除しようとしている時、周りの状況に合わせていた。そんな葛藤を抱えながら生活していた」、「例11：中学生の頃、グループでの問題。とにかくグループで行動しなくてはならない、どこかのグループにいなければならないと思っていた。女子同士の関係が一時期苦痛、中1の冬くらいから、自分を隠すのがどうでもよくなり、一線をひくことをやめた途端友人が本当の友人に。」例10では、両者の葛藤にふれられているが、例11では、自分を隠すことをやめた途端に“本当の友人”ができたという印象深いエピソードである。また、ありのままの自分ではなく、“キャラクター”を演じることで友人に気を遣いながら接していた体験もみられた。「例11：グループでいるときは、同時に複数の人への配慮をしたり、話す内容も気を遣い、『ありのままの本当の自分』というより『キャラクター』を演じている自分がいて、素の自分をみせられる友達が少なかった。そんな毎日は窮屈でしんどかった。」

4. 考察

(1) 同性友人関係における「よかったこと」および「難しかったこと」を通して

みえてきたこと

「よかったこと」の問いについては、チャムシップに表されているような友人関係のポジティブな側面について触れられていた。特に、Sullivan が示しているような「愛の初期の形態」である、「相手のことが自分と同じかそれ以上に重要と思える」友情を描いた、時には自分を差し置いて友人のことを大事にする「無償の友情」について触れられているものがみられ、現代の思春期の友人関係において、チャムシップのような関係を築いている者もいることがわかり、決して友人関係が希薄化しているわけではないといえるだろう。

「むずかしかったこと」の項では、「よかったこと」以上に、具体的にありありと当時の状況が描かれているものが多くみられ、友人関係において苦労や困難をくぐりぬけてきた対象者たちの体験をみてとることができた。ここでは友人とうまくやっていくため、自分の意見を抑えて友人に合わせて同調したり、互いに気を遣いあって関係を維持することに窮屈さや難しさを感じていたという彼女たちのありようが明らかになった。「よかったこと」に示されるような支持的な友人関係がみられた一方で、女子集団を作って友人関係を維持する付き合い方に、困難さがみられたといえる。そのなかで、周囲との関係を維持するための方略のひとつとして、ターゲットを次々と変えて「いじめ」が行われるということもみて取れた。いじめについての記述は大多数の人が触れており、特に中学校時代には日常的に体験されてきた事柄であることがうかがわれた。彼女たちは、「今となっては幼いと思える」ことであるとか、「自分を守るために加担してしまった」など、回想することによって冷静に見つめ直していたが、当時は自分の身を守るため、あるいは周囲との関係を悪くしないため、いじめに加担してしまっていた状況も告白されていた。今回の調査結果から友人グループを形成することで自分の居場所や安心感が得られる等の良さもある一方、集団の人間関係をめぐる難しさもあり、思春期をくぐりぬけてきた彼女たちが、その狭間を生き抜いてきた姿が明らかになったといえるだろう。

(2) 年代別分析—友人関係の発達的变化—

同性友人関係において「よかったこと」の項については、高校時代の友人関係について述べられているものが多かった。小学校時代に、家族の悩みも話せ、互いによくあうような、チャムシップのような関係を築いたというコメントも何名かみられたが、大多数が、一对一の、互いを尊重して自己開示しあうような友人関係を築いたと書かれていたのは、高校時代の友人関係においてであった。友人関係の発達的变化（保坂・岡村，1986）およびその実証的調査（石本ら，2009）にも示されるように、互いの違いを認め合い、相手のことを尊重する付き合い方ができるのは、高校生頃であることがうかがわれる。一方、「難しかったこと」の項で想起された友人関係は、その多くが中学時代のものであり、グループによる友人関係の難しさについて触れているものが多かったことから、この年代の友人関係が特に難しいといえるのではない。保坂・岡村（1986）では、「内面的な互いの類似性の確認による一体感を特徴とする関係」

である chum-group が形成される時期でもあり、互いに同調しあい、違いをみないようにする関係が、難しさを生み出しているのかもしれない。もちろん、中学時代にチャムシップのような親友関係を築いている人もいたが、その難しさの多くがグループの人間関係であったことは特筆するに値する。自己形成の上でまだまだ不安定で、友人関係や友人関係による支持がなければ自分への自信を保ちにくいこの時期に、友人関係が彼女たちを支えるよすがになっている一方で、その友人関係に気を遣いすぎて息苦しくなっている様子もみとれる。思春期という困難な時期を生きる少女達にとって、友人とどのように付き合いながら自分を保っていくのかということが課題になるといえよう。

5. おわりに

以上、現役の女子大学生が、彼女たちの過去の同性友人関係を想起した時に描かれる「よかったこと」「難しかったこと」について、簡単にはあるがまとめてきた。今回の調査では、「よかったこと」以上に「難しかったこと」にリアリティが感じられ、思春期における友人関係の難しさについては、今後とも考察し、深刻な問題に発展しないよう対策を講じていく必要がある。彼女たちにとって、悲喜こもごもありながらも最後にはポジティブな体験として受け止められているような友人関係（「例12：中学時代の親友と、苦しいことを一緒に乗り越え、時には喧嘩をし、仲間外れにされたとしても今となっては良い思い出」）を持てていればよいが、現代の若者は、互いに気遣い合う「優しい関係」（土井，2004）が特徴との指摘もあり、現代の思春期における友人関係の特徴がどのように変わってきているのか、あるいは変わらないのか、今後も引き続き検討していきたい。

文献

- Blos, P. (1962) On adolescence. New York : Free Press. 野沢栄司（訳）（1971）青年期の精神医学 誠信書房。
土井隆義（2004）「個性」を煽られる子どもたち。岩波ブックレット。
保坂亨・岡村達也（1986）キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討—ある事例を通して。心理臨床学研究, 4(1), pp. 15-26。
石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日湯淳子・森口竜平（2009）青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連。発達心理学研究, 20(2), pp. 125-133。
黒沢幸子（2007）いじめと不登校。臨床心理学, 7(4), (40号) 特集 いじめと学校臨床。金剛出版, pp. 460-466。
須藤春佳（2011）親友関係の光と影。神戸女学院大学論集, 58(2), pp. 87-102。
Sullivan, H. S. (1953) The Interpersonal Theory of Psychiatry. 中井久夫他訳（1990）精神医学は対人関係論である。みすず書房。

（原稿受理日 2012年10月1日）